

土佐光信筆 鶴草子について

狩野博幸

- 一 「鶴草子」の諸本
- 二 土佐光信筆のお伽草子
- 三 土佐光信筆「鶴草子」

一 「鶴草子」の諸本

「鶴の恩がえし」として一般に流布する話のもとになったお伽草子の「鶴の草子」は、有明堂文庫『御伽草子』、また『校註日本文学大系』一九巻に活字化されている。京都三条通菱屋町のふ屋仁兵衛が寛文二年（一六六六）に開板した絵入の三冊本が原本である。前記『日本文学大系』の当該部分で三〇頁に及ぶ。よって『日本文学大辞典』の梗概を引用する。

中頃、宰相で右兵衛督を兼ねていた人があった。父の左大将むねまさは世に時めいていたが、この宰相は殊更慈悲の心深く、それがため遂には自らその日の糧にも困り、人との交も薄らぎ、親しい者も遠ざかったので、隠家を求めて静かな余生を送ろうと、あてもなくさまよひ出で、或る山蔭に草の庵を見付けて一

夜の宿とした。（中略）或る日宰相は散歩の帰途、沢辺の小田に雛鶴を見出したが、折しも一人の獵師に捕へられたのを見るに忍びず、肌身離さず持つていた重代の黄金作の刀を与え、請い受けて放ったところ、翌日召使いを伴った美しい女房が一夜の宿を求め、その請うに任せて契りを結び、差出された千金を家主の里人に渡して宏大な邸宅を建て、召使を揃え、俄に大長者となった。（中略）その国の守護官宮崎左衛門督は、（中略）北の方の美しさに魅せられて病となり、（中略）遂に軍勢を整へ宮崎自ら先に立つて押寄せた。北の方は夫を励ましつつ皆紅の扇で虚空を仰ぐと、俄に山風烈しく吹き来つて黒雲館を覆い、雲の中から異類異形のもの数多現れて敵に向つた。（中略）後、北の方は父母の許へ帰るべき時が来たと言う。驚き悲しむ宰相に、生を変えての再会を約し、形見の一筆を乞ひ、自分はこの助命の恩を受けた雛鶴なる由を打明けて大空高く飛び去った。（一部現代送仮名に改めた）

さらに時が経って、約束どおり鶴は人間の娘として再生、宰相とふたたび結ばれることとなり、その後は子供にも恵まれ一家は富貴

繁昌した、という粗筋である。至文堂『日本の美術』五二「お伽草子」に掲載された「鶴のさうし」奈良絵本三冊などもこの類いである。

鶴の報恩談、鶴との怪婚談を示す同様の説話は各地に昔話として流布するところで、『小泉郡民譚集』『信達民譚集』『甲斐昔話集』『北安曇郡郷土誌稿』等に収められる。しかし、これらの昔話では、女房となった鶴が自分の胸毛を抜いて織物を制ることになっており、公刊本で異類異形の者たちが現われて敵を妨ぐという設定とは相違する。

ところで『未刊中世小説解題』において、市古貞次氏はこれらとは別の筋立てによる氏蔵の「鶴の草紙」奈良絵本一冊を紹介している。市古氏が仮りに「別本鶴の草紙」と名づけたこの書の梗概を以下に記す。

昔、筑後の国の「かうのしやう」に大屋の兵部少輔という人物がいた。もとは大層な身分だったが、打続く国の乱れのために所領も奪われ、妻にも先立たれて、今では、一人木樵を業として暮らしていた。ある日のこと、近所の者が鶴を捕えて殺そうとしているのを見、その日は妻の命日でもあって、着ていた帷子と交換に鶴を得、放してやった。翌々日の夕暮、美しい女房が女童を伴って訪れ、一夜の宿を乞う。女房と契りを結んだ男の家は次第に栄えて行く。地頭の息子は女房に横恋慕し、男に難題を吹っかける。「菜種一石をすぐ持参せよ。出来なければ女房を差し出せ」と命令するが、女房は新古どちらがよいかと答えなさいという。男がそうすると、地頭の方ではこれではどうにもならぬと思い、新たに「わざはひ」というものを同道せよと告げる。男はまた女房に相談すると、女房は自分の親の元にそ

れはあると行って、女童に男を案内させる。東北の方へ進んで行くと、立派な邸があり、非常な歓待を受けた。翌朝、女房の両親と思われる人から「わざはひ」を貰った。それは牛ほどの大きさで角のある狼のような獣であった。「わざはひ」を連れて地頭の館に行くと、地頭はその「わざはひ」とやらがどれ程のものか、と嘲る。「わざはひ」が角を一ふりすると、俄かに空が曇り風が吹くと見るや、館中を走り回り、犬や人を喰い殺す。地頭はたまらず降参し、自分の火急の折には助けてくれと頼み、引手物を贈って帰らせた。家に帰った男に、女房は自分は以前助けられた鶴で、あなたも今は富み栄え、命も百歳まで保たれるであろうから、もはやお別れしなければならぬ、と述べる。と、鶴の姿に戻って東の方へ飛び去って行った。

かなり趣の違う話になっているが、決定的に異なるのは「わざはひ(災い)」という怪物が登場することである。市古氏は、本書の説話と流布本のそれとは、話の単純明快さなどから考えて、前者の方が先に成立したであろうと見ている。

二 土佐光信筆のお伽草子

さて、雑誌『古美術』八号において、宮次男氏は一巻本の「鶴の草紙」(論文題名もこれに同じ)を紹介しているが、これが市古氏のいわゆる「別本鶴の草紙」とほとんど話を共通するものであって、「わざはひ」が主要モチーフとなる作品である。市古氏蔵本では、筑後国のかうのしやうの大屋の兵部少輔とあったのが、これでは近江国伊香の郡に住む男、最後に保証された年齢が百歳であったのが八

十歳、という具合に若干の違いがある。しかし、この相違は無視し得ない問題を孕んでいるようだ。殊に、近江国伊香の郡に住む男という設定は重要で、伊香を舞台にした中世説話『伊香物語』は、郡司の美人の妻を国司が懸想し無理難題を吹っかけて奪い取ろうとする話である。伊香の郡という舞台設定は、この物語のほとんどキィワードともいえる意味をもつばかりでなく、両者の成立の時期のズレをも示唆するように思われる。すなわち、宮氏紹介の「鶴の草紙」一巻の方が物語としてより原初的形態をとどめたものと推定されるのである。

絵を見ると、いわゆるお伽草紙絵においてしばしば見受けられる奈良絵的な稚拙な表現や、「類型的に硬化した画致」（宮氏前掲論文）の全然うかがえない本格的な画風であって、宮氏も指摘する如く、箱書の「土佐光信筆」の伝称は信ぜられないものの、江戸時代初期の土佐光則ないし光起、あるいはその周辺の土佐派の画人の手になるものであることは間違いない（現在、フリア美術館蔵）。

ところで、土佐光信筆の「鶴の草子」について、『考古画譜』（『黒川真頼全集』所外）では、

鶴雙紙 一巻

類聚目録載之

倭錦云、土佐光信、鶴草子、

〔補〕古画目録云、鶴草子絵、光信

とある。従来、国文学界では、この記事をもとに、光信作品が確かにあったとすればという前提のもとに、「鶴の草子」の成立を室町中期頃としており、市古氏の前掲書でも、『日本文学大辞典』の解説においてその見方をとっているのである。

宮氏は先の論文の中で、正統的な土佐派の筆法・賦彩を示し、土佐光信筆の伝称をもつフリア美術館本が『考古画譜』の「鶴雙紙」に該当する可能性を示唆しつつ、これに加うるに、大正十二年六月の「下条桂谷翁遺愛品入札目録」に、

光信 鶴草紙巻物倭にしき所載 秋元家伝来 詞書飛鳥井雅俊卿

として一部分の写真つきで掲載されている一巻も併せて考慮すべきことを附記しておられる。

その下条家旧蔵本は、この後、関東大震災をはきんで、所在を明らかにならないまま今日に到っており、くだんの『入札目録』の不鮮明な写真のみ残る現在においては、『考古画譜』のいう「鶴雙紙」が、フリア美術館本と下条家旧蔵本のいずれに相当するのかわからず、また他に該当する未知の絵巻が存在するのかわからず、明らかにし難いわけである。

『考古画譜』および『入札目録』に引用された住吉内記広行（一七五四—一八一）の『倭錦』（東北大学狩野文庫蔵本）には、確かにその光信の項に「鶴草子」の名が挙っており、土佐光信筆と住吉広行が鑑定した「鶴の草子」が『倭錦』編纂の時点まで存在したの疑えないところであろう。

住吉広行の鑑定能力に関して、ここでいささか検討しておく必要があるだろうか。『倭錦』は光信の作例として「地藏堂草子」の名も挙げてはいるが、この縦一七・二センチメートルの小絵巻の巻末には狩野探幽の紙中極があつて土佐光信筆としてあるものである。探幽の紙中極を無視して光信筆と住吉広行は鑑定したのだが、近時の研究は「地藏堂草子」を光信筆とすることを常識としている。『国華』八五一号で「地藏堂草子」を紹介した宮次男氏は、その時点ではこれを光信筆とすることを躊躇されたが、以後の光信絵巻研究の集積

をもとに、改めて光信作品との結論に達し、訂正意見を述べられた（同氏論文「足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって」、『美術研究』二六〇号）。

さて、『倭錦』が「鶴草子」の名と共に挙げられている、やはり異類物・怪婚談のお伽草子の一つである。「狐草子」は、現在、京都市の個人蔵に帰しているが、この作品が文明一九年（一四八七）の「星光寺縁起」二巻（東京国立博物館蔵）と前後する時期の光信の作であることは、既に宮氏の先掲論文において実証された。吉田友之氏はさらにこれを進めて「星光寺縁起」にやや先行する時期、文明一三年（一四八二）頃に制作されたものと見る説を提出している（同氏著『土佐光信』、日本美術絵画全集5）。いずれにしても、この「狐草子」と通有する画風の「鶴草子」の存在が、『倭錦』の鑑定の結果として、かくてここに予想されるに到るのである。

『倭錦』では、さらに光信筆として、「鶴草子」「狐草子」と並べて、やはり異類物のお伽草子の一つである「鼠草子」の名も掲げている。この「鼠草子」としては、東京国立博物館本・サントリー美術館本絵巻が室町期の制作と考えられるものの、画風は奈良絵的傾向が露わなものであり、到底光信筆とは考えられない。住吉広行の鑑定能力から見て、足利義尚所持の「狐草子」と同列に置いたとも思えない。光信筆「狐草子」は縦一七・二センチメートルという通常絵巻の半分の小巻である（「地藏堂草子」と同寸法であることに留意されたい）が、東博本・サントリー本いずれの「鼠草子」も三三・五センチメートルの大型絵巻であって、画風同様に共通点がないのである。『考古画譜』に、

鼠雙紙 一巻

倭錦云、土佐光信、鼠草紙類聚目録同之

〔補〕古画目録云、鼠草子、光信筆、養川院蔵、

〔補〕古画類聚目録云、鼠草紙絵、狩野某蔵、光信筆、

〔補〕義海曰、蜂須賀侯爵家蔵となれり、

とある「鼠草子」一巻は、果して存在するのであろうか。筆者の臆断が許されるならば、現在ハーヴァード大学附属フォッグ美術館に寄託中の「鼠草子」一巻こそが、それに相当する作品であろう。人物の面貌の表現、画中の障屏面に寄せる画家の関心度の高さ、つけたて技法による草花の描写、何よりもその構図・色彩感覚に見られるみずみずしい平明さは、他の光信筆「星光寺縁起」「硯破草子」「狐草子」等の光信初期絵巻群と共通している。しかも、フォッグ美術館寄託本「鼠草子」の縦幅は一六・五センチメートルの小巻であり、『倭錦』所載の「鼠草子」が本巻に相当する可能性は極めて高いといえよう。

因みに、右にしばしば指摘して来たことの一つに、縦幅一七センチメートル程度の小絵巻ということがある。詳細は避けるが、かつて梅津次郎氏は「硯破絵巻その他——小絵の問題——」（『国華』八二八号）において、室町時代の公家日記類にしばしば書き付けられた「小絵」なる文字に着目し、下手な奈良絵風絵巻とは質を異にする一群の「小絵」すなわち小品絵巻は、宮中や将軍家などの低年齢層用に用いられたのであり、それらは宮廷絵所に属する絵師によって制られたものである、との見解を打出された。「硯破草子」には幼少時の足利義澄の自署があり、「狐草子」も足利義尚が所持していたことが明らかである。また、「狐草子」「硯破草子」「地藏堂草子」そして「鼠草子」などがどれも一七センチメートル程度の「小絵」で

あり、同時にいずれもが絵所預の土佐光信筆であったと考えられることも、示唆に満ちている。

『倭錦』所載の光信筆のお伽草子には、「狐草子」「鼠草子」「鶴草子」の他に「藤袋草子」の名が挙っている。「藤袋草子」は猿が主要な役割を演じる異類物のお伽草子であるが、現存するか否かを知らない。しかし、慶安二年（一六四九）に住吉如慶が光信の原本を模写した縮図が残っている（国立国会図書館蔵）。如慶といえ、例の「狐草子」の巻末に息子の具慶と共に「土佐光信朝臣筆」という紙中極めをしており、恐らく「藤袋草子」もまた「狐草子」等と同画風・同体裁の絵巻であったと見られる。現に、如慶の縮図はその性格上粗画ではあるものの、奈良絵的画風とは異なることは明確にうかがえる。

「狐草子」「鼠草子」の現存はほぼ確かめられた。唯一つ残る「鶴草子」に関してであるが、例のフリア美術館本が正統土佐派の作風を示しながらも、光信筆とは考えられないばかりか、時代もかなり下り、さらに「狐草子」「鼠草子」とも画風を全く異にしているとするれば、前述の下条家旧蔵本がにわかにな大きな意味をもち始めてくるのである。

三 土佐光信筆「鶴草子」

下条桂谷旧蔵「鶴草子」は、現存したのである。

まず現容を紹介する。

二重箱。内管に較べ外管は新しく、外管蓋表に「鶴ノ草紙
繪光信筆
詞書飛鳥井雅俊卿と墨書、蓋側面に貼紙があつて「光信 鶴ノ草紙」の墨

書があり、朱文方形桂谷「無藏」印がそなわる。これにより本絵巻が下条桂谷所蔵品であることは明白である。

内管では蓋表に「鶴草子」詞書 飛鳥井殿
繪 土佐光信の墨書がある。側面に貼紙があり、世第貳百六十九の墨書と、朱文円形「秋元」印、朱文方形「秋元」印がそなわるので、『入札目録』の秋元家伝来の記述とも一致する。中には、「鶴草子詞書 飛鳥井殿雅俊（菱形不明墨印）」、「鶴之草子 土佐光信真筆（白文不明印）」の二枚の極書と、土佐光信筆と鑑した明治一七年三月付の山名貫義による副状が入っている。

ここに、大正一二年六月の入札以来その所在が明らかでなかった下条家旧蔵「鶴草子」が出現したのであるが、問題なのは本巻が土佐光信筆と認められるか否かに絞られるだろう。結論から先にいえば、この「鶴草子」の絵の筆者は、例えば足利義尚所持「狐草子」が土佐光信筆と鑑されるのと同様の理由で、土佐光信と考えられる。

まず、絵が正統の土佐派の筆法・賦彩であることは明白で、しかも縦幅一七・三センチメートルの「小絵」であつて、「硯破草子」「狐草子」がそうであつたように、本巻もまた公家か將軍家の子女のお伽用として制作されたと考えてよいであろう。しかも、奈良絵的作風とは無縁の上品な画風は、宮廷絵所関係の絵師の手になることを容易に認めさせる。人物の顔貌の特徴、野外の薄などに見られるつけたて技法のしぼとい筆力、画中障屏面に寄せる画家の深い関心、色彩の稀れに見る明澄性、そして物語の核心を一気に曳き出すクローズアップ表現、それらのいずれをとつても「狐草子」「星光寺縁起」「硯破草子」と密接な共通点をもっている。『倭錦』以下の古画目録が土佐光信筆として挙げた「鶴草子」が本巻に相当すると見て、ま

ず齟齬ソゴは生じないであろう。

本巻の物語は『未利中世小説解題』に紹介された「別本鶴の草紙」と同一であり、「わざはひ」が登場する。「狐草子」と同時期の制作と見てよいと思われるが、そうすると文明一三年（一四八一）頃にはこの物語も成立していたことになるわけで、国文学界にもいささかの話題を提供することになるろう。また主人公は近江国伊香の郡に住む男となっており、やはり「鶴草子」と「伊香物語」の関連はあると考えることが妥当と思われる、フリーア美術館本が本巻の影響のもとに制作されたことが知られるばかりでなく、「別本鶴の草紙」がこれの若干の改変を経ていることも判るのである。

第一段は、最初に仏典を引いて、殺生を戒め慈悲を説く。仏教説話の影響が濃厚といえよう。それから物語が始まる。近江国伊香の郡に一人の男が住んでいた。妻にも先立たれ、世の中も物憂くて、人にも交わらずにわびしく暮っていた。ある時、獵師が鶴を捕えて殺そうとしているのを見た男は、慈悲の心がおこり、殊にその日は妻の命日にも当るので功德にもなろうと、肌身につけた帷子と交換に鶴を得、放してやる。

絵は三場面で構成される。男が山蔭の茅屋で一人佗しく暮す体。鶴を捕えた獵師に帷子を渡すところ。鶴を放つて見遣る体。

第二段。翌々日、十七、八ばかりの美しい女房が女童を伴って訪れ、一夜の宿を乞う。男は近所の家で敷物を借りて来たものの、食べ物はどうすべきかと思案していると、女は用意して来た物を取り出して用意させた。女は、父母とも遠く離れており、頼みにする人ともはぐれてしまったので、これも縁と考えて頼りになって欲しい、という。男はやがて女と契りを結んだ。男の家はこの後段々に富み栄えて行く。

ここで、十七、八ほどの女とあるが、流布本およびフリーア美術館本では二十歳ばかりの女となっている。

絵は、女が訪ねて来た場面と、いまは富み栄えて侍女も仕え、屏風や襖も新調された邸。

第三段。地頭以下これを聞いて嫉ましく思わないものはなかった。地頭の二十五、六ばかりになる息子は、男の女房の美しさに魅かれ、どうかして得たいものだと思を悩ましていた。そこで男を呼び、菜種千石を持って来い、それが出来なければ女房を差し出せ、という。男は嘆きその由を女房に伝えると、そんなことは簡単、菜種は古いものでも新しいものでも仰せの通り出しますといいなさい、と女房がいう通りに地頭に答えた。地頭はこれは無理だと思い、今度は「わざはひ」という物を連れて来い、という。男がまたも女房に相談すると、「わざはひ」という物はありません、私の父母に相談してみなさい、と手紙を書き、女童に案内させる。うしとらの方角をさして山の中へ入って行くと立派な邸が現出。その夜は非常な歓待を受けることになる。

菜種千石は、「別本鶴の草紙」・フリーア美術館本は一石となっている。

絵は、まず地頭の邸で難題を吹っかけられる場面。続いて思い悩む男を前に手紙を書く女房。その庭の秋草の描写は「狐草子」四段のそれと酷似する。そして山道を女童に案内されて行くところ。見事な門の前に佇む男の姿。さらに婢に足を洗って貰う場面。最後に座敷の中で酒肴のもてなしを受けている。第三段の絵はかなり長い。極めて手際よく処理されているのが目につく。

第四段。夜に入ると月が出、若い男たちが管絃の道具をもって来

てもてなす。翌朝、六十ばかりの男、四十あまりの女が出て来るが、女房の両親と思われる。彼らは、名残り惜しいけれどもお別れしなければなりません、といい、侍共に命じて「わざはひ」を連れて来させる。「わざはひ」とは、牛ほどの大きさで、角のある狼のような獣であり、首に鈴をつけていた。

絵は三場面。月の下、若い男たちが管絃を奏する。両親と男の前に「わざはひ」が曳き出される。女童と「わざはひ」を連れて帰る体。

第五段。男は「わざはひ」を地頭のもとに連れて行き、これが「わざはひ」というものです、汝の能力をみせよ」というと、「わざはひ」は角を一振り二振りする。すると空がかき曇り、激しい風が吹いて蔀格子を吹き飛ばす。四方へ走り回り、犬を喰い殺し、男ども女どもを打倒してこれも喰い殺す。地頭はすっかり肝をつぶし、「わざはひ」を鎮めてくれと頼む。地頭はこの男はただ者ではないと思い、自分に大事が起こつた時は一方の大將として助けってくれといい、引手物を与えて帰した。

絵は、男が「わざはひ」を連れて帰って来たところ。そして地頭の邸で「わざはひ」が存分に暴れ回り、さらに地頭より引手物を頂戴する場面。

第六段。家に戻り事の至細を男が語ると、女は次のようにいう。自分は実は助けられた鶴です。今は富み榮えて、あなたの命も百歳まで保たれるでしょう。名残り惜しいが別れねばなりません。そして鶴の姿になって東の方角へ飛んで行った。男は涙ながらに見送るのであった。百歳までの命、という部分は「別本鶴の草紙」と共通し、フリア美術館本では八十歳となっていた。本巻がいずれとも異

なるのは、この後にさらに文章が続くことであり、しかも中国の逸話であることが興味ぶかい。——唐土にもこんな例があった。子安という者が、人の鶴を殺そうとするのを見て衣と換えて放してやった。程なくして子安は亡くなり、陵陽山の麓に埋められた。その冢の上の木へ鶴が来て、三年間、子安子安と呼び続けて死ぬと、子安は甦えつた。子安は鶴を助けたために生き返った、といい、その後仙人となって長寿を保った。

絵は二場面。女房が真相を告げるところと、鶴が飛び去る場面であるが、この場面転換は同じ邸の中で描かれ、わずか戸の一枚を隔てるだけで処理される。かかる手法は「狐草子」の第二段などでも使われており、光信得意の手法であった。面白いことに、ここでは庭に茂る薄のつけたて技法による表現も共通している。

全体的に平明ですがすがしい色調は「狐草子」や「星光寺縁起」と共質的で、画中障屏画への画人の関心度の高さに加えて、例えばこの「鶴草子」第二段に配された屏風と、「狐草子」第三段の障子に描かれた金泥の霞をとまなう薄図との酷似など、土佐光信筆と認めることを躊躇させる要素は見当らないといつてよい。

そして、土佐光信のお伽草子絵の優作として知られる「狐草子」が、不幸なことに第一段の詞書が欠落しているのと較べてみると、この「鶴草子」は詞書・絵とも揃っており、先に種々論じて来た事柄とも併せて考えると、美術史学界のみならず国文学界にも裨益するところ大なるものと思う次第である。(一九八三・一・七脱稿)

「鶴草子」 絵巻寸法 (単位センチメートル)

縦横	17. 3 986. 4	
1	28.6	詞 I
2	25.9	詞 I
3	12.0	詞 I
4	59.8	絵 I
5	25.0	絵 I
6	49.1	詞 II
7	59.9	絵 II
8	48.2	詞 III
9	45.2	詞 III
10	62.8	絵 III
11	64.5	絵 III
12	64.3	絵 III
13	34.2	絵 III
14	46.3	詞 IV
15	62.5	絵 IV
16	27.0	絵 IV
17	48.6	詞 V
18	63.8	絵 V
19	63.5	絵 V
20	47.7	詞 VI
21	47.5	絵 VI

〔翻刻〕「鶴草子」 絵巻絵詞

異体・変体文字は現行のものに改め、読み易くするため句読点、カッコなどを施した。改行は原文どおり。

《第一段詞》

それしひはもろくのせんこん(善根)
 中にもともすくれたり。殺生は(最)
 よろつ(悪業)のあくこうの中にことに
 をもし(重)。されは、経には「ほとけの御心
 は、たゝこれしひなり(慈悲)。しひに(慈悲)
 そむけるのいたりは、殺生なり。一
 切のいのちあらんもの、ことさらに
 ころすことなかれ」といへり。殺生
(善)のものは、いのちみしかく、ま(貧)
 つしく(賤)、いやしきのむくひをう
 け、しひある人は、いのちなかく(永)、

とみたとき(畜)、ふくをまねくものなり。
(近江)

いつのころの事にかありけむ。あふみ
(伊香)の国いかこのこほり(郡)、かた山さとに
(妻)

一人のおのこ待りけり。つまにをく
 れて、なにとなく世のなか物うく
(交)

おほしければ、人にもましはらす、
 あやし(眺)のすみかに、なかく(通)すくしけり。
(家)

つれく、いゑ(家)を出て、ふもとのさと、木こり
 山かつなどのすみか(慰)をみて、なくさみ
(舞)待りけり。あるとき、れうしの鶴を

とりて、すて(殿)にころさむとするを
 見て、かなしひの心おこれりければ、
 ことさら、けふはわか(舞)つまのうせし

日なり、これをはなちたらんは、よき
(功德)くとくにやとおもひ、「その鶴ころさて、
 われにたへ」といふ。かなふましきよし

いひければ、「たゝこはゝこそあらめ」
(舞)とて、はたにきたりけるかたひら
(稚子)

をぬきて、「これにかへよ」といひけれ
 は、「さらは」とてつるをやりて、とらせ
(舞)

ける。おのこ、これをいたきて、人も
 見ぬかたはら(女)に行て、「なんち、すて
(抱)

にころさるへかりしを、かくこひゆるし
 侍るそ。ちくし(番生)やうなりとも、おもひ
(女)

しれ」とてはなちける。

しれ」とてはなちける。

〈絵I〉

《第二段詞》

かくて、なか一日ありけるくれほとに、
うつくしけなる女はうの、よはひ十七(房)
八はかりなるか、めのわらはひとりく(具)
して、かのおのこのもとに、きたりつゝ申
やう、「物まうてしけるか、日くれて、行
さきもしらす。やとかしたまひなんや」
といへは、おのこ、たゝ人とも見え
させたまはぬ御すかたなるに、「わか
いゑは、あやしけにて、しきもの
なども有す。いかゝ」といひければ、「なにか
くるしかるへき。たゝ一夜」としきりに
のたまへは、「ともかくも」といひつゝ、あた
りなるいゑにて、しき物をかるに、
あたらしきむしろ一かしたりける(籠)
をしきて、とゝめぬ。くひ物なとも(食)
いかゝすへき、とおもひけるところに「よう
いして侍」とて、めのわらはをよひて、
いろくくの物とも、とりいたして、「いま
しはし」とて、とうりうしぬ。きて、女(逗留)
はうのいふよう、「われは、ちゝはゝあれとも、
とをきほとにて、へたゝりけり。たのめ(父母)
し人にもはなれぬ。いつゝをさすとも(頼)

なく、まとひきて侍る。御えんをたのみ
たてまつらはや」といへは、おのこないく、
いかて、とおもひけるに、これをきゝて、夢
うつゝとおもほえす。やかてちきりを(契)
むすひて、日かすふるほとに、いゑのうち、
やうくともしからすなりて、人あまた(ま)
つかはれけり。この女はう、みるめのうる
はしきのみならず、こゝろさまもやさしく、
人のため、なさけあさからさりき。

〈絵II〉

《第三段詞》

かゝりけるほとに、その所のちとう(地頭)
しやうくわん以下、しかるへきものとも、
きゝおよふ。人の心を、いたましめす、と
いふことなし。そのちとうの子に、廿五
六はかりなるか、ことにこゝろをう(母乳母)
つして、はゝめのとなとに、「いかゝすへ
き。このおのこのまうけたる女はう、
見めかたち、心はへの、人にすくれたる
を、いかゝしてかは、あふへき」と、つねにな
けきけるを、ちゝもれきゝて、「さら
ば、いかにもしてとれかし」といへは、この
子、はかりことをめくらして、かのおの

ここに、「^(業種)なたね千こく、まいらせよ。それかなはぬものならば、なんちか女房を、しはしめ^(召)さむするぞ」といふに、「すこしなりとも、かなひかたし。いはんや、千石は、いかにしてまいらせん」とおもひなから、たつねてみむとて、まかりかへりぬ。おのこのうちなけきたるふせ^(風情)いを見て、女はう「^(至細)なにことぞ」とへは、「^(別)へちのしさいにあらず。ちとう殿より、わ^(我御前)こせをおもひかけて、かゝる大事をのたまひて、さらすは、わこせをめさむするぞ、とおほせあるなり。いかゝすへき」といひければ、きゝもあへす、「やすきことにこそ。なたねは、ふるきあたらしきにいつれにても、おほせにしたかはんと申たまへ」といふ。おのこ、ちとうへまゐり、このやう申せは、「さてはかなはし」とて、「^(災い)なたねはをきぬへし。さらは、わさはひと^(災い)いふ物のあらんするを、たつねてまいらせよ」と、又おほせうけたまはりて、「なたねは、世にあるものなり。わさはひ、といふものは、世のなかにあ^(悪)しきことをこそいへ。すかたあるものならはこそ、りやう

しやうもせめ」とおもひなから、いゑにかへりて、又、女はうにかたれば、「さる物あり。さらは、おやにてある人のもとへ、このやうを申て見ん。このめのわらはをく^(具)して、おはしませ」とて、ふみかきとらせぬ。これより、うしとら^(方)とらのほうをさして、山のなかへ行へしと、をしふるまゝに行ほとに、いとをからず、ゆゝしけなる所あり。まへにたてすなまき^(立砂)なとして、しゆ^(主)てん、ちうもん^(中門)、つり殿^(釣)まで、きんく^(先)をちりはめ、目もおよはぬさまなるに、おのこを^(先)は、まつ門のほかにをきて、めのわらは、ふみもち^(尋常)いりぬ。しはしありて、しんしやう^(尋常)なるおとこ、女はう出きたりて、「これへいらせたまへ」とて、うちへよひいれ、あしなとあらはせて、きよらかなるさ^(座敷)しき^(招)へしやうしつゝ、おとこおんな、あまたさふらひて、さまくにもてなす事、かきりなし。

〈絵Ⅲ〉

《第四段詞》

夜にいりて、月くまなかりけるに、わか

きおとことも、くわけんのくそくとも(管絃)
 もちて出て、さけをよもすからもて
 なしけり。夜ふけてのち、六十はかり
 なるおとこ、四十あまりなる女はう、
 わかつまのちゝはゝとおほしきか、
 「わかいとをしとおもふひめを、たすけ
 たまへる人をは、いかて、おろかにおも
 ひたてまつるへき」なといひて、やう
 くにもてなして、「御なこりこそお
 しくおもひたてまつれとも、さら
 は、とくかへりたまふへし」とて、さふ
 らひともよひいたして、「よのわさは
 ひ、くしてまいれ」といへは、「うけたまはる」
 とて、おほかみのことくなる、おそろ
 しけなる物の、うしのせいなるか、
 つのふりたてゝす(鈴)つけたるを、から
 めくして出きつゝ、「やれ、わざはひ」と
 いへは、すゝつけたるかしらをさ
 しあけてふりぬ。「かまへて、この殿の
 おほせのまゝにふるまへ」といへは、又、
 かくとうちうなつく。「さらは、これを
 つれておはしませ」といへは、やかて、さ
 きにたてゝわかいゑにかへりぬ。

〈絵IV〉

《第五段詞》

女はうこれを見て、「かまへて、なんち、殿の
 おほせにすこしもたかふなよ。あやまりなく
 ふるまへ」といひふくめぬ。すな
 はち、これをくして、ちとうのもとへ
 まいり、「おほせしわさはひくしてまいり
 てん。なんち、のふつくせ」と申ければ、
 つの二ふり、三ふり、うちふるとも
 見えし、にはかに、そらかきくもり、かせ
 おひたゝしくふきて、しとみかうし、
 みなふきやりぬ。さるほとに、四はうへは
 しりまはり、まつ、いぬのありけるを、
 すこしもとゝこほらす、かみくらふ。
 そのゝち、けらふよりはしめて、とねり、さう(雑仕)
 し、みつしの女はうとも、うちたをしく
 らふに、とゝこほりなくはしりまはる
 こと、いかつちのことし。上下(男女)なんによ、けう(興)
 をさまして、おちまとふこと、かきりなし。
 したひに、さしきへせめのほるに、ちとう(次第)
 さはきまとひて、「かゝるよしなき事
 いひ出て、うきめをみるごと、いかゝすへき。
 あれしつめなんや」といふに、このおのこ「わ
 さはひ、いまはしつまれ」といはれて、
 かのおのこのそはに、からまりるたり。
 さて、ほともなく、そらもはれ、かせしつ

まる。ちとう、これを見て、おのこにむかひて、「なんちはたゝ物にあらす。われ、もしいかなるふしきもあらんときは、一方のたいしやうをすへきか」ととへは、「しさいにおよはず。このくせ物か候はんかきりは、この御りやうに、いさゝかもらうせきはましますましき」と申せは、「なんち、さらは、はんしのうしろみせよ」とて、ひきて物とらせて、かへしけり。

〈絵V〉

《第六段詞》

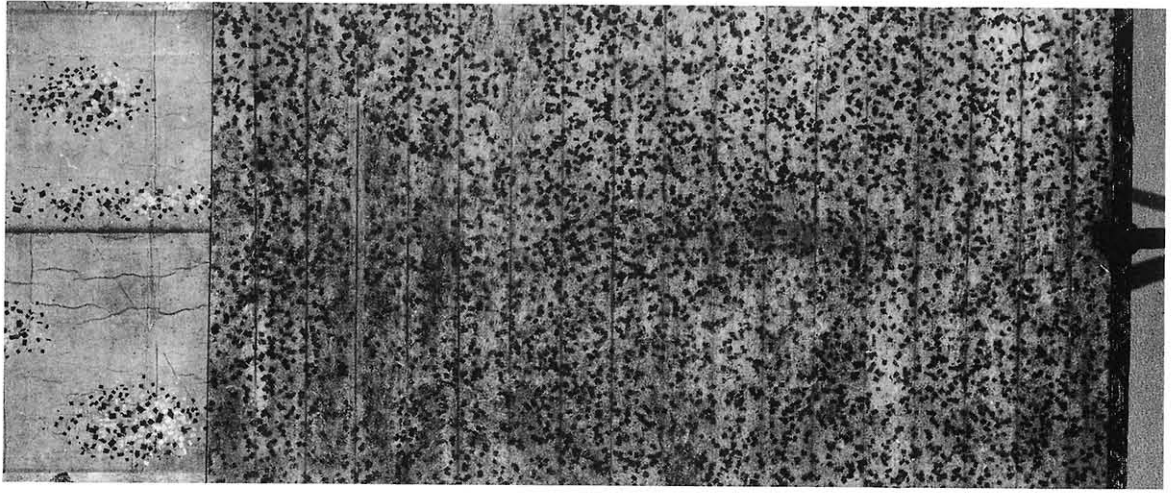
さいしよにて行て、このやうをかたれば、この女はう「まことには、われはたすけられたてまつりし鶴なり。その御おんをほうせむかために、かやうにちきりをこめぬ。いまはたのしみさかへ、いのちも百さいまてたもちたまふへし。なこりはおしけれとも、いまはわかれたてまつるへし」とて、鶴のすかたとなりて、ひんかしをさして、とひさりぬ。なみたせきあへさりけり。もろこしにも、さるためしあり。子安といひしもの、

みちのほとりにて、人のつるをころさむとするを見て、ころもにかへて、はなちけるに、子安ほとなく身まかりき。陵陽山のふもとにおさめしに、そのつかのうへの木へ鶴きたりつゝ、みとせのあひた、子安々々とよひつゝ、つるにむなしくなりぬれば、子安よみかへり、「われ鶴をたすけしむくひにて、鶴、又、わかいのちにかはれり」といふ。そのち、仙のほうをならひつゝ、久しきよはひをたもてり、となん申める。されは、かゝるてうるいまでも、あはれひのころあらは、をのつから、そのむくひあるへきことゝぞ。

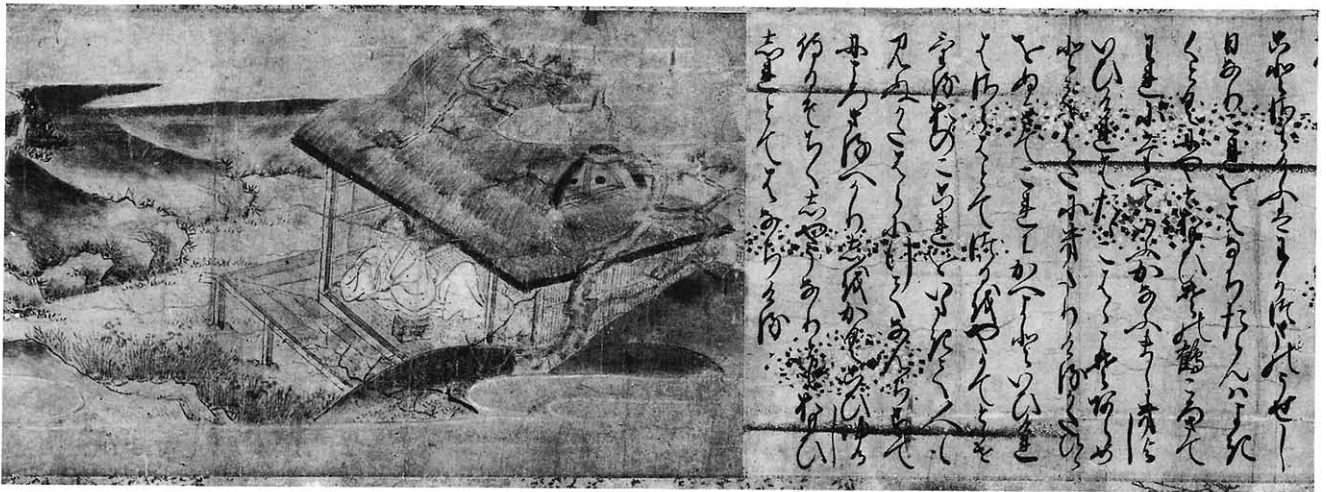
〈絵VI〉



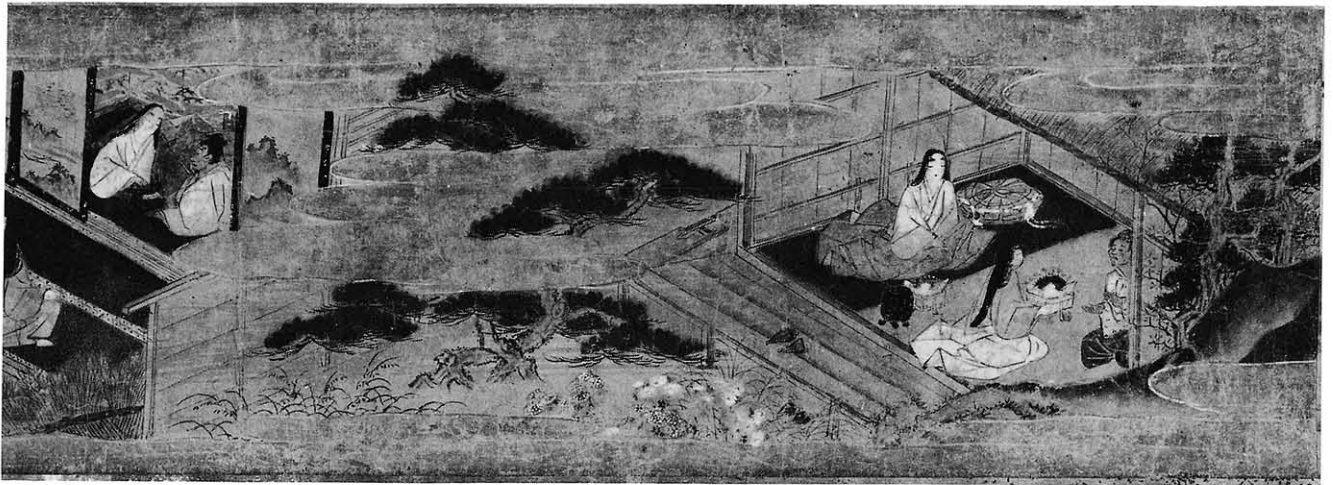
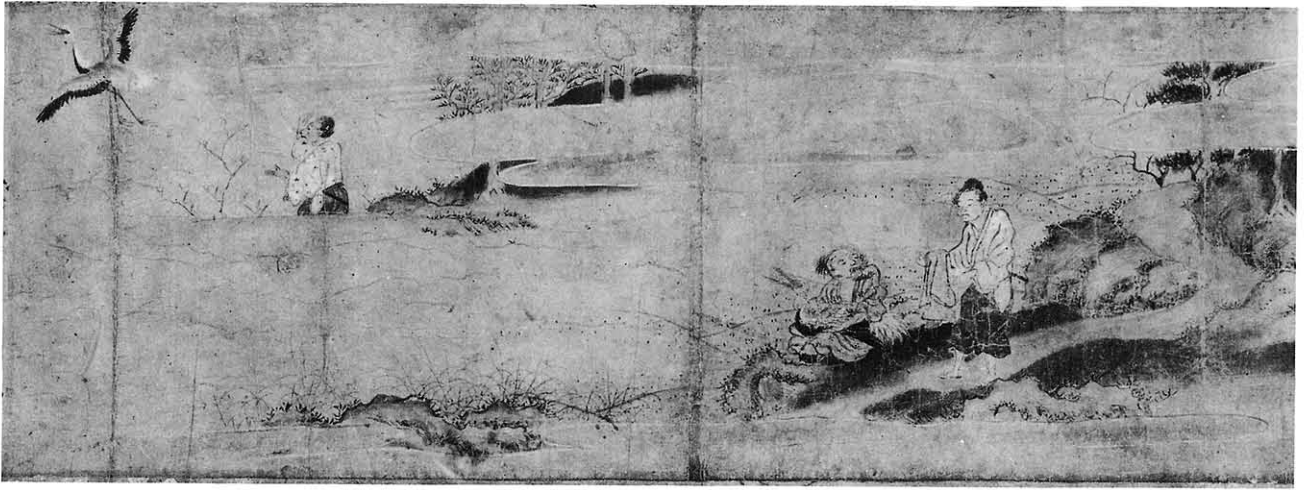
鶴草子 第三段



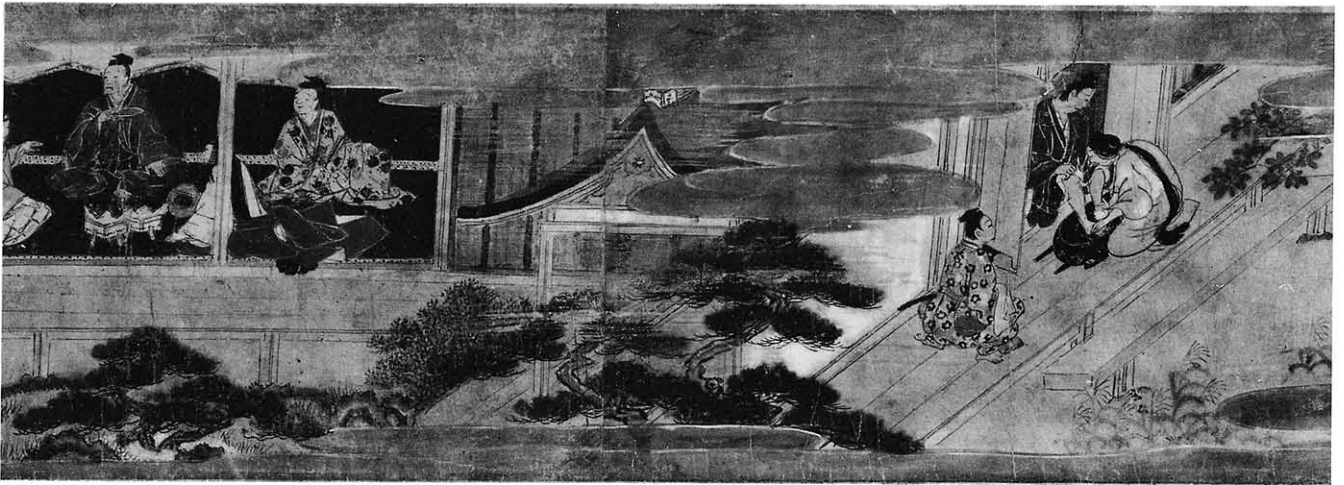
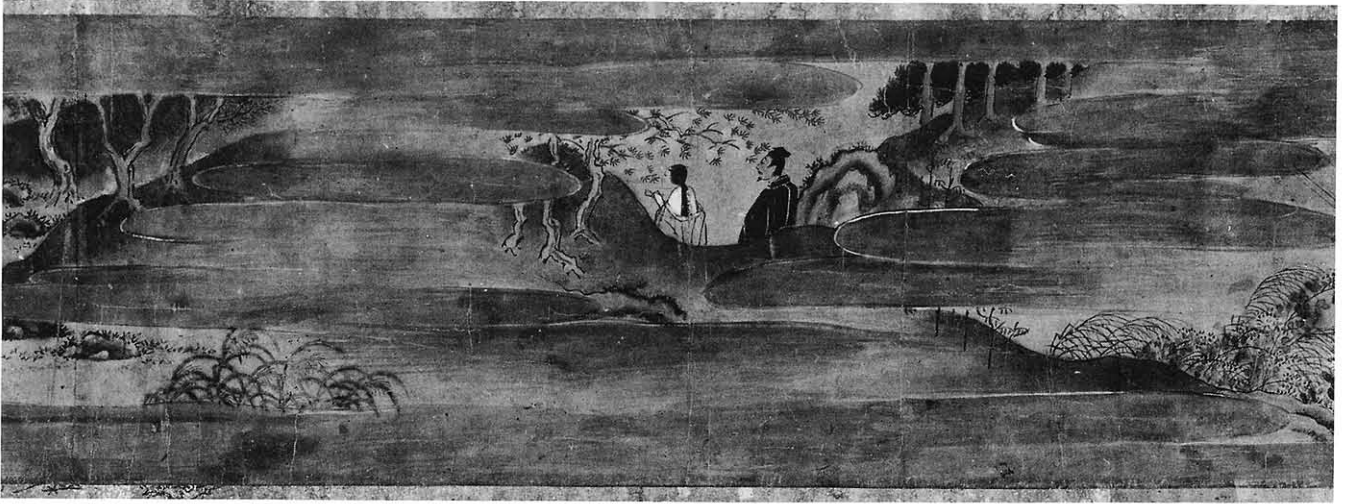
鶴草子
見返し

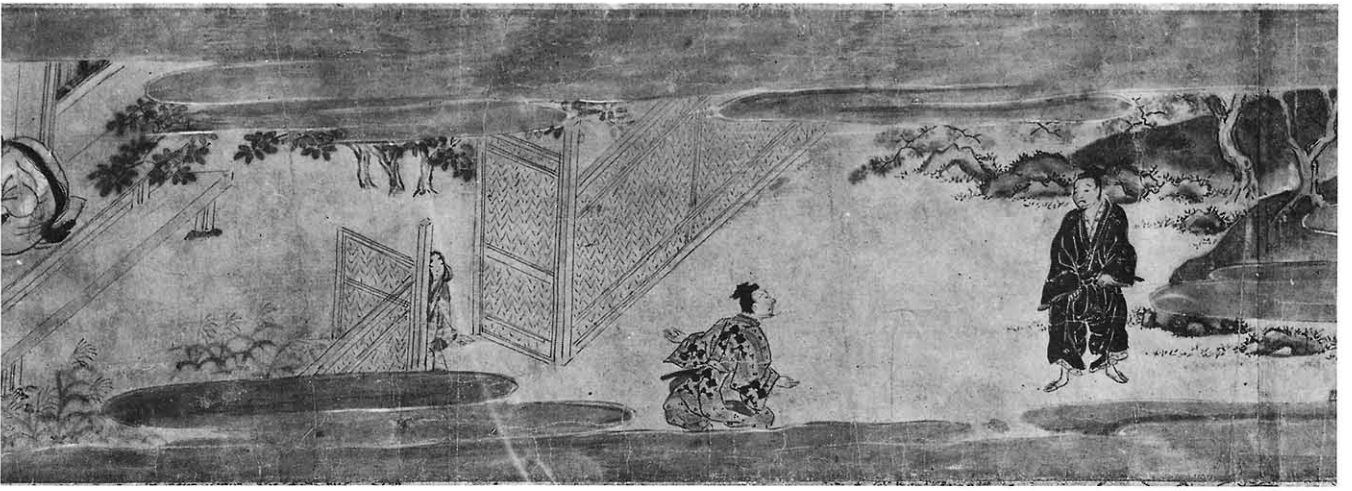


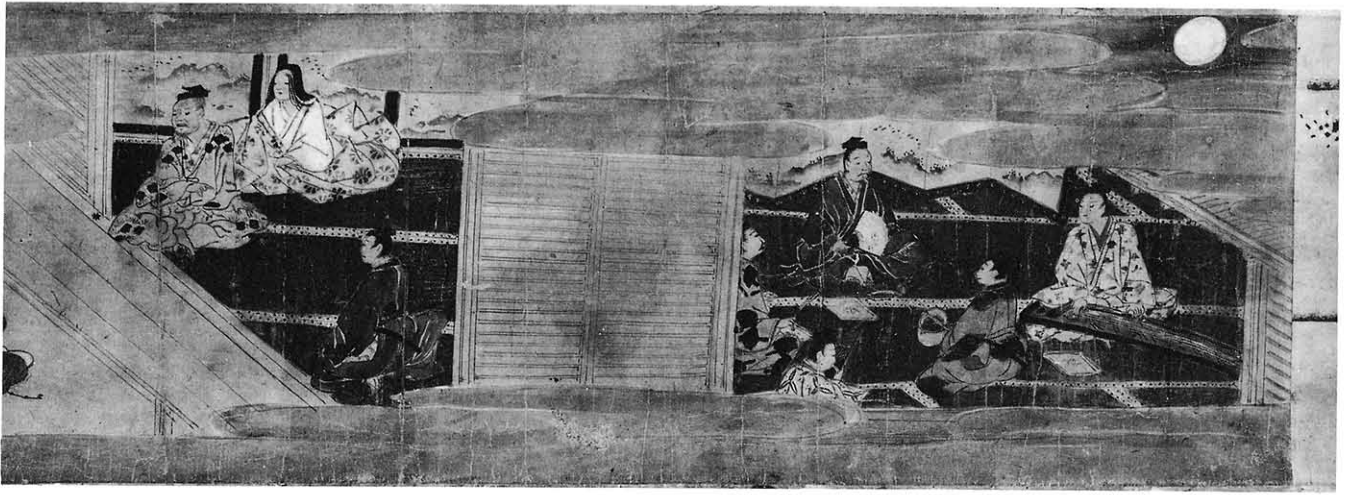
第一段
絵



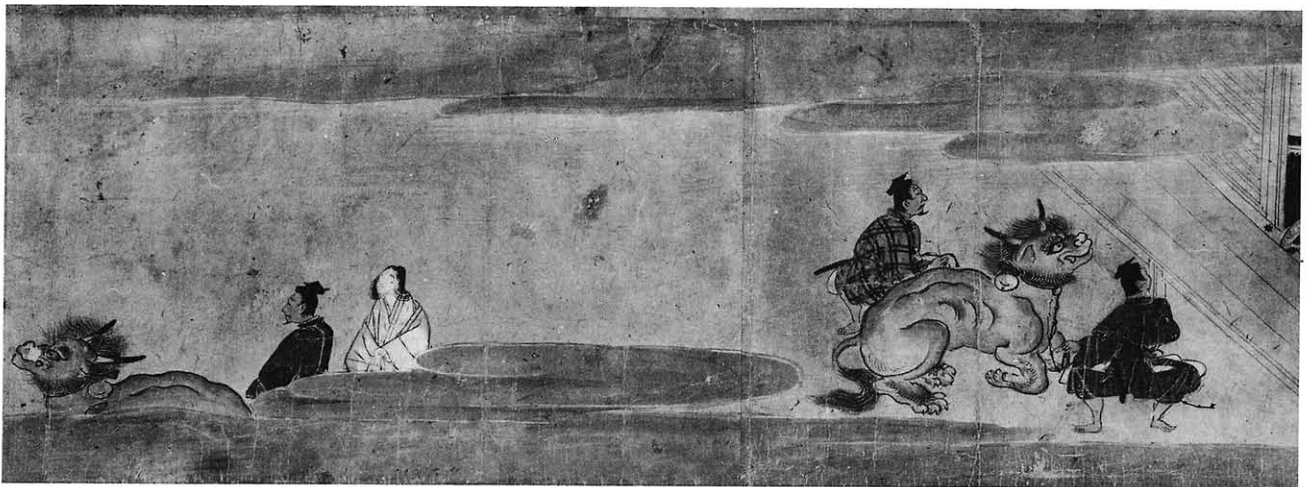
第二段
繪

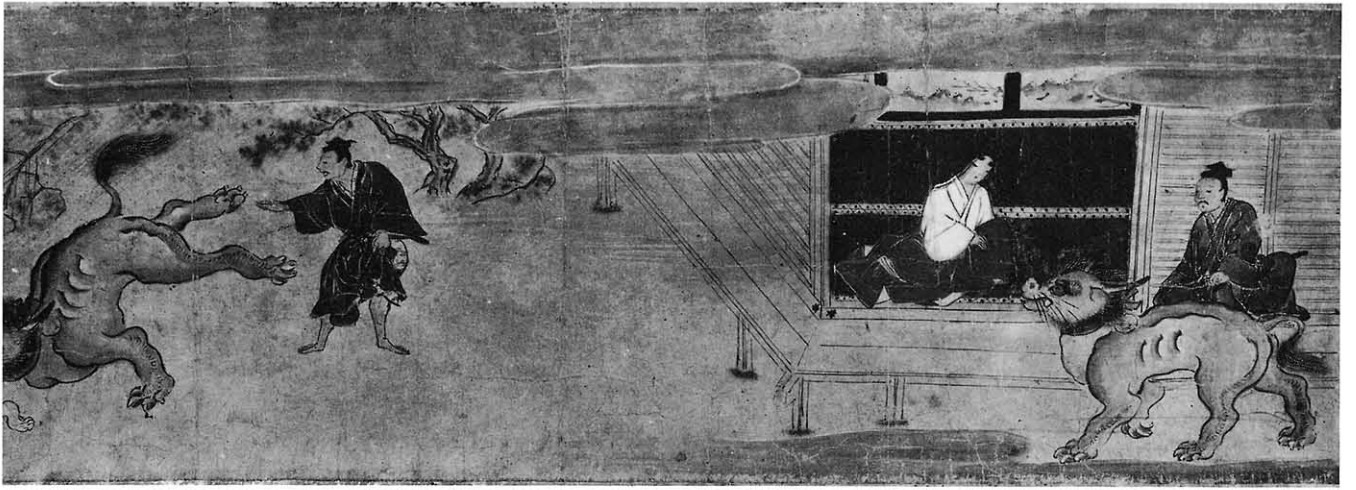






第四段
絵





第五段
繪



